

## 牧師室から (2022.2.27)

ロシアがウクライナに侵攻したというニュースが流れた。2月24日にウクライナを囲む形で全面攻撃が始まり、今もウクライナの首都キエフに、ロシア軍が近づいているようである。避難する人々の姿がテレビに映し出されていた。まさかの状況に、不安と恐怖の中にいるウクライナの人々のことや、そして、これが遠い国の他人事ではないという思いもあり、昨日はなかなか眠れない夜であった。

東北にいる時のことである。近隣の教会でコンサートがあり、行ってみたら、ウクライナの女の人が歌っていた。華やかな民族衣装を着ている、きれいな顔の女の人が、ウクライナの民族楽器であるバンドウーラを弾きながら、歌っていた。ピアノとギターを合わせたような音に透明な彼女の歌声、それに絵のような彼女のきれいな姿が、そこにいる人々に夢の中にいるようなファンタスティックな雰囲気を感じさせてくれた。歌の間にトークがあって、記憶に残るのは、ウクライナでは、女の人が好きな男性には、自分が作った刺繍をプレゼントするが、好きではない男性にはカボチャを贈るのだと言っていた。カボチャが好きな私は、カボチャさえも優しく思われるが、失恋された男の人には心痛いプレゼントであるのだろう。聞くわたしには微笑む話であるが...

もう一つのウクライナに関連する思い出は、20年前のことであるが、新宿で開拓伝道をしていた時である。教会員の中に、仕事を紹介する事務所を持っていた人がいて、当時は礼拝場所も借りていたもので、週の間は私もその事務所に寄ることが多かった。韓国から来た人たちが仕事を捜しにくるので、そこで出会う人たちに伝道をしたり、いろいろな相談に乗ったりするためであった。

ある日のことである。午前中事務所に行ったら、男の人が4人座っていた。私にはなじみがないスラブ系の顔つきで、旅行客のようだが、その服装や様子から貧しく疲れているように感じられた。

教会員の話を知ると、ウクライナから来た人たちで、日本で仕事を捜しているが、なかなか見つからなくて、寝るところもないので、事務所で何日か泊まるようにしているということであった。ウクライナというと、私にはあまり親しみがなく、とても遠い国のように思われた。言葉もわからないこんなに遠い国まで、仕事を捜しに来なければならなかった彼らのことを思い、何とも言えない悲しみが湧いてきたのを覚えている。

なるべく早く、ウクライナの戦争が終わりますように。美しく歌っていた女の人の笑顔と歌が戻るウクライナの町々であるように。そして、寝場所もなく彷徨う人々が帰る故郷として、ウクライナの平和と繁栄があることを祈っている。

(鈴木善姫牧師)